

## No.6 袴田 京太郎 「17才」

Kyoutaro Hakamata

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 1月15日付 立川市市報記事より

袴田京太郎の「十七才」と名付けられたラッパに似た作品は、ドライエリアに植物のようにニョキニョキと寄り添っている。

この作家の仕事は、穴があいた有機的な形が思いも掛けぬ姿を見せるものが多く、彫刻の新しい考え方を提示している。

この作品も、よく見ているとタイトルに示されたように「十七才」の持つ不安定で、行方定まらない青春の悩ましさを感じてくる。それは奔放なエネルギーが背伸びして、遠くを眺め回しているような趣である。袴田京太郎自身も若く、今後の彫刻界を拓いていく有望な作家だ。

昔は17歳は立派な成人だったが、今日この頃、20歳の成人式の若人はまだまだ若い。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

例えば境界線(ボーダー)をとりはらって自由になるということは地表に縛りつけられている人間にとっては、空を飛ぶ美しい夢のように思えるものだ。

彫刻と環境、美術と社会、西洋と東洋、男と女。そういうさまざまな二極の融合が来るべき未来のための必須課題であるような幻想。

ボーダーは、悪意に満ちた差別でしかないのだろうか。

僕は立川に10年間住み、仕事の関係上多くの17才と出会った。立川は僕にとって一番身近な現実であり、17才は一番身近な理想であり夢であった。そしてこのプロジェクトの完成と時期を同じくして立川と17才から離れることになる。

僕はそれらになじまないし、それらは僕を愛さない。そこに住み続けることでボーダーを引き直し、そこを離れることでボーダーは完成し同時に消滅する。

これは彫刻、これは環境、これは美術、これは社会。ボーダーラインを挟んでお互いが観察し合う。ひとつになれないことを前提としてそこに在り続ける。極めて個人的なものであるはずの彫刻が環境と融合するために、その毒やタブーを含めた本質的な要素をなくしてしまってもいいはずがない。

このプロジェクトが、そういった安易な融合なき「新しい共存」を目指すものであってほしいと思う。

10年後に出るはずの「結論」が20年後への重要な指針を含んでいることを期待している。